「五本骨扇に月丸」の佐竹氏家紋

連載

常陸時代の佐竹氏
― 500年の軌跡を追う ―

【第12回】
佐竹百年の乱

山入氏の居城、山入城

JR常陸太田駅から通称「鯨ケ岡」と呼ばれる旧中心街を馬場八幡宮方面へ向かう。緩やかな下りを過ぎると、右手に正宗寺がみえる。県道２９号（常陸太田那須烏山線）を進む。和田地区を経て松平交差点を道なりに行くと、山田川を渡る。山田川の右岸（下流に向かって右側）は山並みが迫る。川を渡ると、道路進行右側に看板が立っている。「市指定文化財山入城跡入口（国安城）常陸太田市教育委員会」と書いてある。

看板通りに進むと、細い道沿いに人家と水田が広がる。やがて人家が消え山道となる。途中の竹藪に「至山入城跡 国安町会国安げんき会」と書かれた案内板がみえる。舗装された山道を登っていくと、眼下に展望が開ける。主要遺構は徒歩で登る山頂付近にある。「本郭は５００㎡位の平坦地で、北側に物見の櫓台跡があるが、現在は農作物を守る為、滝田神社が祀られている」（『佐竹氏関連中世の城館址（２）』、梶山義光著）。

山入城（同市国安町）は要害山（標高１９１ｍ）山頂と尾根にある。城の東南に山田川が流れる。まさに要害の地に築城された山城である。ここが歴史上、「佐竹百年の乱」の当事者となった山入氏２代の佐竹（山入）与義以下、山入氏代々の居城である。佐竹氏四代にわたる「佐竹百年の乱」は、一族・家臣を巻き込み実に百年も続いた歴史上、稀に見る内乱であった。

山入氏、産金地を支配

佐竹氏は、「前号」で述べたように９代貞義の時、足利尊氏に従って南朝側と戦い、奥七郡を取り返した。常陸国の「守護大名」として新たな領地も手に入れ、嫡男１０代義篤は室町幕府侍所頭人を務めた。しかし、取り戻した奥七郡は宗家、分家、有力家臣による複合的支配となった。特に貞義七男の師義は、九州まで落ち延びた尊氏と行動を共にし、功多しとして奥七郡の北部に領地を得た。

『佐竹家譜』は、師義について次のように述べている。「父（９代貞義）、兄（１０代義篤）に代て京、鎌倉に往反して数軍功あり。因て幕府の為に賞せられ、邑を山入の地に食む。国安、小田野、袋田、依神（上）、高垣（柿）松平等の祖なり」（注・カッコ書きは筆者）とある。師義から分かれた一族の袋田氏や依上氏の支配地は八溝山の山麓地域。家祖源義光以来、佐竹氏が追い求めてきた産金地である。

久慈川は八溝山を源流とする。山入氏一族はその中流域から上流域を支配地とした。山入氏始祖師義の後を継いだ２代与義、３代祐義らは支配地を堅持し、産金開発にも関心を持った、と考えられる。南北朝時代を勝ち抜いた佐竹氏は、その結果として金砂合戦敗北で失った奥七郡を取り戻した。しかし、失う以前のようにそのすべてが佐竹宗家の領地とはならなかった。新たに山入氏の領地が誕生したのである。

上杉氏の養嗣に反発

奥七郡内の安定は、佐竹氏１２代当主義盛に後を継ぐ男子がなかったことで一気に崩れた。「応永十年（１４０３）、義盛に嗣子がなかったため常陸守護代で佐竹氏の宿老小野崎通綱、江戸通景は佐竹一族の小田野自義らと協議の上、関東管領山内家上杉憲定の次男で憲基の弟竜保丸（後の義憲・義仁・義人）を養嗣することに決めた」（『常陸太田市史』）。

「ところが、当時佐竹一門の山入与義は、他姓（上杉は藤原氏）からの家督相続に反対をとなえ、義盛の弟義有をたてようとした。同門の稲木義信や長倉義景、額田義亮らは、与義と考えは同じであった」（『同市史』）。こうして佐竹宗家と一族間の内乱「佐竹百年の乱」が始まった。微妙なバランスを保っていた奥七郡は、一気に宗家側と山入氏（反宗家側）に分かれ、武力衝突に至ったのである。

その最初の戦いが長倉氏の居城、長倉城（常陸大宮市長倉）の攻防戦。竜保丸を推す鎌倉公方、

足利持氏は、追討軍を長倉城に派遣、山入氏や長倉氏を攻略した。竜保丸は常陸入りを果たした。佐竹氏１３代義憲（後の義人）の誕生である。しかし、一族間の攻防は、足利幕府と鎌倉公方を巻き込みながら百年にもわたって続いた。日本の歴史上、同族間で百年にもわたって内乱状態となった例は聞いたことがない。

他姓からの家督相続

佐竹義盛が上杉氏を養子に迎えた理由として筆者は『奥七郡から出発―佐竹氏の軌跡―』（茨城新聞社発行）で次のような見方を紹介した。当時、上杉氏の意を受けて土岐原氏が稲敷地域に進出し、さらなる勢力拡大に向かうのではないか、と佐竹氏側は危惧を抱いていた。このため当主の義盛は、上杉氏との軋轢を避けるため上杉憲定の次男を養子に迎え、融和策をとったのではないか。

また、『常陸太田市史』は「この縁組は佐竹氏の積極的意向というより、上杉氏側の強い働きかけによったとする見方もある」との説も紹介している。いずれにせよ、「乱の背景には佐竹本宗家の権力強化に庶子家が反発したことがあった」（『戦国佐竹氏研究の最前線』）という指摘は、その通りであろう。この縁組が「佐竹本宗家の権力強化」の側面を持っていたことは否定できない。

とはいえ、当主義盛が「権力強化」を図ることは「本宗家」の立場としてあたりまえのことであろう。果たして、「本宗家」が「権力強化」をすることで百年にもわたって「庶子家が反発」するであろうか。筆者は「本宗家の権力強化」に反発したのではなく、そのためにとった「他姓からの家督相続」に反発したのではないか、とみる。当時の勢力状況下、上杉氏からの養嗣しか選択肢がなかったとしても、庶子家側は「佐竹源氏」の一線を譲ることはできなかったのではないだろうか。

山入師義と『源威集』

「佐竹百年の乱」は宗家側が１３代義憲（人）、１４代義俊、１５代義治、１６代義舜まで四代にわたる。山入氏は２代与義、３代祐義、４代義知、５代義真、６代義藤、７代氏義の山入氏滅亡まで続いた。山入氏が長期にわたって攻防戦を展開できた背景には足利幕府とのつながりがあったことは否めない。幕府は鎌倉公方を牽制するため関東の有力武将を「幕府扶持衆」とし、与義もその一人となった。

山入氏が執拗なまでに「佐竹源氏」にこだわった理由はどこにあったのか。『太平記』と同じ軍記物に『源威集』がある。江戸時代、秋田・佐竹家に家臣の真壁氏が献上した伝写本で、佐竹氏史料を保管している千秋文庫（東京）に所蔵されている。『源威集』は「源氏ノ威勢ヲ申サンカ為ノ物語」で、著者が孫たちの質問に答える形で「源氏の祖神八幡大菩薩」から南北朝期の「東寺合戦」までを述べている。

注目点は『源威集』を『東洋文庫』（平凡社発行）に収録・解説した加地宏江氏が作者を山入師義と特定していることである。『源威集』は「足利政権成立の過程を記述し、その「正当性」を主張している。尊氏に従って南朝と戦った師義が同じ源氏の足利幕府樹立をまとめたとしても不思議ではない。その記述は佐竹源氏の正当性を語るにも等しい。山入氏はなぜ源氏にこだわったのか。「佐竹百年の乱」を考える時、筆者はいつも山入氏とこの『源威集』の関係に思いをはせてしまう。

なお『結城市史』は『源威集』が「結城直光の著述にかかわるもの」として取り上げていることを付記する。

歴史ジャーナリスト
茨城県郷土文化研究会会長
富山 章一

「佐竹百年の乱」の当事者となった山入氏の居城、山入城跡を示す案内板＝常陸太田市棚谷町